

【報告(再掲)】

『大学時報』2018.9月号／特集：自校史と大学博物館
 「大学史を基軸に研究、教育と公開事業
 一日中を懸けた東亜同文書院から愛知大学へ」

愛知大学豊橋研究支援課長 田辺 勝巳

1. 大学史を基軸にブランディング

大学在籍中に大学史を理解することは、学生生活の充実に向けた有効なオプションである。大学入学当初の環境下において、「どのような背景で大学が創立され、今に至っているか」を理解し、さらに大学史を通して歴史観や先輩方の実績を認識し、視野を広め、人間としての成長につなげることも可能となる。偏差値基準による入試結果の入学生は、第一志望ではなく不本意入学の場合が多い。一方、入学した大学は、他大学大学院への進学を望まなければ入学した時点で最終学歴校となる。そこで大学は、1年生の早い時期から大学史に関係する教育を施し、最終学歴校のブランドを学生に理解させ、自信をもたせることが必要である。さらに卒業生には、長い人生の中で大学史を含め母校を懐かしみ、母校への想いを持ち続けてもらいたい。

そこで本学では、大学史を基軸として、研究面では「東亜同文書院大学記念センター」が中心となって進める研究を、教育面では大学史に関わる講義などを、公開事業としては「大学記念館」を中心とした取り組みを行っている。さらに、本学を知ってもらう対象を在学学生だけでなく、小・中学生から高校生、卒業生、一般の方々と捉え



大学史を中心に公開事業を行い、本学のブランドアップにつなげる展開をしている。

2. 愛知大学の創立と建学の精神

愛知大学は、太平洋戦争終戦の翌年1946（昭和21）年11月15日、6大都市以外では初めて、旧制大学として愛知県豊橋市に49番目に設立された。愛知大学の建学の精神には、「世界文化と平和への貢献」「国際的教養と視野をもった人材の育成」「地域社会への貢献」が掲げられた。そこには戦争への反省と民主主義の希求、そして、国際社会と地域社会の発展に寄与するグローバルな資質を備えた人材を育てるとの決意が込められている。

戦後の苦難の中、東亜同文書院大学ほか外地校から引き揚げてきた教員が中心となって設立した本学ならではのこそ、72年前に掲げられた建学の精神は、グローバル社会

が成熟し、地方創生が推奨される現代においても、響き通じるものがある。

愛知大学は現在、名古屋校舎、豊橋校舎、車道校舎の3校舎体制で、名古屋校舎には大学院と法・経済・経営・現代中国・国際コミュニケーション学部を、豊橋校舎には大学院と文・地域政策学部と短大を、車道校舎には法科大学院を設置する文系総合大学である。

3. 「大学記念館」と東亜同文書院大学記念センター

2018年、創立以来72年目を迎える本学の豊橋校舎は、1946(昭和21)年創立当時、豊橋市の強力な支援により旧陸軍第15師団(のち教導学校、陸軍予備士官学校)跡地を提供され、発祥の地となった。敷地内にある旧陸軍第15師団司令部の庁舎は愛知大学本館となり、1996(平成8)年までの50年間、事務棟として利用された。1993(平成5)年、愛知大学および本学のルーツ校・東亜同文書院に係る研究施設として東亜同文書院大学記念センター(以下、記念センター)が発足し、愛知大学本館に設置された。その本館は、建物の価値が評価され、1998(平成10)年に文化庁により登録有形文化財に指定された。これを機に「大学記念館」と改名され、博物館相当施設として、愛知大学とルーツ校・東亜同文書院に係る資料、コレクションを展示し、その業務を東亜同文書院大学記念センターが担っている。

東亜同文書院大学記念センターは、2006年に文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業(オープン・リサーチ・センター整備事業/5年間)に「情報公開と東亜同文書院をめぐる総合的研究」として採択され、2012

年には文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(研究拠点を形成する研究/5年間)の「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」に採択され、10年に及ぶ助成を受けた。それらを通して、東亜同文書院45年史と愛知大学72年史(2018年時点)の研究を促進するとともに、研究の公開事業として大学記念館を運営している。

大学記念館の建物ルーツは、110年前の1908(明治41)年まで遡る。当初は旧陸軍第15師団司令部からスタートし、次いで陸軍教導学校本部、さらに陸軍予備士官学校本部、そして戦後の愛知大学本館へと変遷してきた。陸軍第15師団では、1909~1925年の17年間に7名の師団長が着任し、1917年に7代目として皇族である久邇宮殿下が着任された。その翌年、殿下の長女良子女王が皇太子裕仁親王殿下(のちの昭和天皇)の御妃に決まり、10月には皇太子裕仁親王殿下と良子女王が豊橋を訪問され記念植樹がなされた。それは、豊橋校舎内に健在の姿を留めている。本年は、その記念すべき年から100年目に当たる。

4. 大学史に関する講義

本学では「愛知大学の成り立ちを知る」をテーマに、2018年度春学期開講分として共通教育科目「総合科目」の一科目として大学史教育科目を豊橋校舎、名古屋校舎にて開講している。講義は、東亜同文書院大学記念センター研究員である石田卓生非常勤講師による13回と、藤田佳久愛知大学名誉教授による2回の計15回行われた。

履修者は、豊橋校舎では希望者311名の中から抽選で選ばれた202名で、名古屋校舎では先着順の190名であった。かつて行



われた大学史の授業はオムニバス方式であったが、その時の反省点を取り入れ、専門の研究者1名を主体とする授業に変更した。テキストは、入学時に1年生全員に配付した藤田佳久編『日中に懸ける：東亜同文書院の群像』（中日新聞社、2012）を利用し、毎回感想文の提出とともに、講義終了時に関連ページを学生に伝え、翌週までに復習を課題とした。

なお、講義内容は、72年間の愛知大学史だけでなく、45年間のルーツ校・東亜同文書院とのつながり、さらに東亜同文書院の創立にいたるそれ以前のグローバル教育の変遷までも含んでいる。

豊橋校舎に所属する文学部、地域政策学部、短期大学部の1年生約800名は、「文学部総合研究」「学習法」「基礎演習」の1コマを利用し、大学記念館において記念センタ



ースタッフによるギャラリートークやビデオ鑑賞などによる大学史教育を受講している。また、名古屋校舎現代中国学部の希望者は、チャーターバスにて豊橋校舎を訪問し、大学記念館で大学史教育に参加している。

また、博物館学芸員課程の実習科目「博物館実習Ⅱ」は、大学記念館での授業が組まれている。

5. 「大学記念館」の常設展

① 大学史展示室「東亜同文書院の45年、愛知大学の70年」

1901（明治34）年に中国上海に開学した愛知大学のルーツ校・東亜同文書院（大学）の45年間と、1946（昭和21）年に創立し今日に至る愛知大学の70年を、それぞれの大学史とそのつながりを含めた変遷を軸として、関係史資料や紹介パネルを多数展示・公開している。中でも、東亜同文書院の『学籍簿』『成績簿』、中国側に接収されていた書院の華日辞典原稿カード（日中国交正常化前の1954年、日中友好協会を通して返還され、1968年『中日大辞典』に結実し刊行）、20世紀前半の近代中国を記録した貴重な「大調査旅行」の関係報告書および愛知大学設立許可申請書は必見の価値がある。

では、東亜同文書院がどのような大学であり、愛知大学がどのような経緯で創立されたかについて触れてみたい。

愛知大学のルーツ校は、1901（明治34）年に中国上海に誕生した「東亜同文書院」

（1939（昭和14）年、大学に昇格）。当時の東アジアは、欧米列強の圧力が清国へ一層強まり、日本も危機感を抱いていた。そのような中、弱体化しつつある清国と提携し、東ア

ジアの安定を図ろうとする動きが、それまでの欧米指向中心であった日本の中に新たに芽生えた。それをまず具体化したのが、荒尾精による日清間の貿易を目指し、貿易実務者を育成しようと1890（明治23）年に上海に開学した日清貿易研究所であって、卒業生約90名を輩出した。その後、日清戦争が始まり、日本が勝利すると、清国への賠償金請求が唱えられる中、荒尾は反対表明を繰り返し、日清貿易発展のために検討を続けた。一方、近衛家の筆頭となった近衛篤磨は独学の上、欧州留学を経験。2回目の欧州訪問時に欧州列強のアジア戦略に関する情報を入手すると、東アジアの安定化には日清間の教育・文化交流が必要だと痛感する。そこで、1900（明治33）年、近衛は清国の近代化改革を目指す実力者の劉坤一と張之洞の両総督との協議により、南京に「南京同文書院」を開学し、日本人学生24名を派遣し清語・英語・商業・政治などを学ばせた。「南京同文書院」の設立直後、北清事変によって南京の危機が高まったため、1901（明治34）年、上海へ移転し、高昌廟にキャンパスを設置し、「東亜同文書院」に改名した。書院の経営は財団法人東亜同文会が担い、初代院長には根津一が就任して、荒尾精が意図した日清間の本格的な貿易実務者を育成するビジネススクールとしての歩みを始めた。近衛は発展を図るべく、新たな府県費（給付奨学金）制度による全国から学生募集を行った結果、上海へ留学した卒業生は5,000名に上った。カリキュラムは、清語・英語の語学と貿易・商業科目に、中国国内を主なフィールドワーク先とする「大調査旅行」を配置した。「大調査旅行」は、2～6名が班を組み、希望地域にテーマを持って3カ月以上の徒歩を中心とする大調査であり、

中国国内から東南アジアへと広がりを見せ、40年間に延べ700コースに及んだ。東亜同文書院大学は、1945年（昭和20）年の敗戦後、財団法人東亜同文会の解散とともに幕を閉じた。

そこで、最後の学長本間喜一の指示により、中国からの帰還時に、教職員・学生が『学籍簿』『成績簿』をリュックサックなどに大切にしまって日本に持ち帰ったのである（5,000名に及ぶ全ての『学籍簿』『成績簿』は、今も愛知大学に保管されている）。

上海から帰還した本間喜一は、1946（昭和21）年に、財団法人東亜同文会（書院の経営団体）の会長代理一宮房次郎を訪ね、「東亜同文書院大学に代わるべき新大学の設立を、東亜同文会として考慮していただきたい」と申し入れを行った。数日後、「採用しないことに決定した」との回答を受け取った本間は、「教職員有志が相集って設立しても差支えないか」と問い、一宮氏は「有志で設立されるについては何等差支えない。我々も或る程度の援助を与えるに^{やぶさか}吝ではない」と答えた。本間喜一、小岩井淨の両氏は、1946年5月30日に東京・九段下の若宮旅館にて書院の教職員を招集。神谷龍男、木田弥三旺など13名が参加し、新大学設立と9月開校という目標が決議された。大学設置場所は久留米市・別府市・豊橋市・半田市・鎌倉市などが候補となり、「大学将来の発展」を見据えて慎重に検討された。中部日本には法文系大学がなく、構想何如によっては全国的大学として優秀な学生を集めることができるとの見地に立ち、さらに旧軍関係の建物の借入が有望であること、甘藷の大量生産地であり2,000～3,000名に及ぶ学生の食糧に不安がないことから、豊橋市を最適地として決定。大学名

は、「智を愛するものが集う」との意味を含んだ「愛知大学」に決まった。愛知大学は1946年（昭和21年）11月15日、昭和天皇による裁可を受け、吉田茂内閣総理大臣から旧制大学として許可された。【『愛知大学十年の歩み（1956）』参考】

② 荒尾精、近衛家4代、根津一の書展示室

東亜同文書院の前身としての役割を果たした日清貿易研究所設立者の荒尾精、東亜同文書院設立者である初代東亜同文会会長の近衛篤磨（貴族院議長）、書院第5代院長であった近衛文磨（内閣総理大臣）、書院初代院長の根津一、犬養毅（内閣総理大臣）の書を展示している。

③ 愛知大学設立者名譽学長本間喜一展示室

愛知大学設立者本間喜一の生涯にわたる関係資料・写真等のコレクションを展示している。

④ 山田良政・純三郎兄弟、孫文展示室

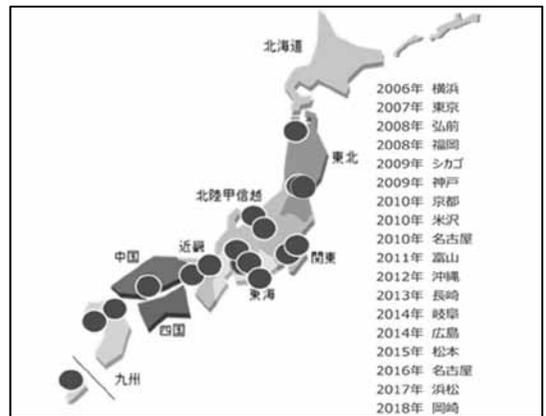
近代中国の革命家孫文に協力した東亜同文書院関係者の山田良政・純三郎兄弟に係る関係文献、中でも孫文と関係者の直筆書、掛け軸、孫文の妻・宋慶齡のサイン入り写真など、多数を展示している。東亜同文書院の前身校・南京同文書院の教員であった山田良政は、書院を辞職して孫文が指揮する「惠州蜂起」（1900年）に参戦し戦死したが、弟の純三郎は東亜同文書院の教員を務めたのち、兄の遺志を継いで孫文の秘書役として活躍した。

純三郎の四男である山田順造氏（東亜同文書院出身）は父、伯父と孫文の深い関係を明らかにするため、大量の写真や文献などを集められており、のちに本学に寄贈された。

6. 「大学記念館」の公開事業

① 東亜同文書院から愛知大学へ」展示会・講演会

2006（平成18）年から毎年、全国各地（米国シカゴを含む）で展示会・講演会を18回開催している。大学記念館に所蔵している史資料コレクションの展示と、東亜同文書院、愛知大学史に関わるパネルや資料などを展示公開。併せて「東亜同文書院45年＋愛知大学70年」をベースに、開催地との関わりなど研究を公開する講演会を開催している。2018年度は、愛知県岡崎市において6月29日～7月1日に「上海と東亜同文書院大学・愛知大学」と題して開催し、来館者は300名を数えた。なお、18回までの開催地は図のとおりである。



② オープンキャンパスでの大学記念館 開放（豊橋校舎）と出張展示（名古屋 校舎）

本学の特徴の一つとして、東亜同文書院大学から愛知大学への経緯、および愛知大学創設時に掲げられた設立の趣旨の内容とその意義などを、高校生に直接伝えている。史資料コレクションやパネルを利用した簡単なギャラリートークを開催するとともに、パネルなどを展示公開している。参加者には、高校生のほか保護者の参加もあり、中には親となった卒業生から声を掛けられることもある。卒業生から次の世代への継承は喜ばしいことである。



③ J R 東海さわやかウォーキング、名鉄 ハイキング

2015年9月、J R 東海さわやかウォーキングの新コース「軍都」と呼ばれた豊橋市の歴史遺産を訪ねて、において、2020名の参加者が豊橋校舎を巡り、大学記念館には1234名の来館者があった。2016年10月には、「歩いて巡る豊橋の歴史～創立から70年を誇る愛知大学記念館を訪ねて～」が催され、901名が来館され、2017年2月には、名古屋鉄道ハイキングにて813名が来館された。2018年11月23日には、3回目のJ R 東海さわやかウォーキング「芸術と食欲の秋 日本画家平松礼二の作品展開催中の愛

知大学記念館、として立ち寄りポイントに決定している。

一般の方々に本学の歴史と本学ならではのコレクションを見ていただける良い機会として歓迎している。「地方創生」「地元への還元」の一環として、地域と本学がwin×winの関係構築できる喜びを感じざるを得ない。

④ 名誉博士 平松礼二画伯 特別展示会

卒業生で本学名誉博士である平松礼二画伯（日本画）の特別展示会を、2017年10月12日から創立記念日までの1カ月間、大学記念館2階7部屋にて開催した。平松氏は、1965（昭和40）年に法経学部を卒業され、第1回中日大賞展大賞、第57回中日文化賞他多くの受賞歴があり、フランス、ドイツにて展示会も開催された。

展示作品は、日本各地、東海地方、中国、フランス・ジャポニスムのほか、2,000年から11年間担当された「文藝春秋」の表紙画など、多彩な大作の中から平松氏自ら厳選された原画作品58点と原画屏風6点であり、来館者は2,564名と大盛況の毎日、大学記念館での催しの中で過去最多となった。

（※『大学時報』は、一般財団法人日本私立大学連盟により、隔月で刊行されています。大学の先進的な取り組みや高等教育に関する情報が掲載されており、第344号（2012.5発行）からは、webサイトにて本文の閲覧ができます。

『大学時報』No.382（2018.9）号では特集「自校史と大学博物館」が企画されました。立教学院、東洋英和女学院、愛知大学、國學院大學、早稲田大学、大阪大学の6大学の寄稿原稿が掲載され、その寄稿原稿を、日本私大連盟の許可をいただき、一部修正、変更のうえ再掲いたしました。）